

「明けるまで Lofi」

—初稿—

2025/8/4

雨森 れに

〈人物表〉

崎山 圭 さきやま けい

(30) 会社員

榎谷 朱里 えたに あかり

(30) 圭の幼馴染。デザイナー

1.

コンビニ・駐車場（夜）

深夜。車が一台停まっている。

車に寄りかかり煙草を吸っている榎谷朱里（30）。
タイトなミニワンピースを着ていて、長い手足が映えている。

のんびり歩いてくる崎山圭（30）。

Tシャツに半袖シャツを重ね、デニムを履いている。

圭 「よお」

朱里 「ん。（煙草を消して）アイスコーヒーよろしく」

圭 「おめーが誘ってきてんのになー」

朱里 「毎年同じ文句、おつかれさん」

朱里が車に乗り込む。白い脚がゆっくりと車内へ。

圭、脚を見て唾を飲み込む。

ドアの閉まる音で我に返り、慌ててコンビニへ。

2.

車内（夜）

高速道路のETCを通る。

朱里が無言で運転している。

アイスコーヒーが二人分、ドリンクホルダーにある。

圭、コーヒーに手を伸ばす。

朱里の太もがむき出しになっていることに気づく。

視線は太ももに向いたまま、ストローくわえる。

朱里 「なんか音楽かける？」

圭 「へっ？」

朱里 「へっじゃないよ。最近どんなん聴くの？」

圭 「あ、ああ。（コーヒーを戻して）最近のはあんまり……」

Lofiの作業BGMとかは聴いてるけど」

朱里 「生意気にもチルってんだ」

朱里が茶化すように笑う。

圭 「むかつく言い方すんなよ」

朱里が車の音楽プレイヤーを再生する。

Lofi調の音楽がかかる。

朱里 「私もチルってるから一緒だねってこと」

圭は面白くないと言わんばかりの表情。

背もたれに体を沈める。

会話が途切れ、音楽が揺蕩う。

ふたりが見ているのは、延々と続く夜の道路。オレンジ色の道路照明が流れていく。

圭が、朱里の太ももをちらりと見る。

圭 「すげえ言いくいんだけど」

朱里 「なに？ おしっこ？」

圭 「ちげーわ。さっきコンビニですませたわ。じゃなくて、服。どうした。きわどいじゃん」

朱里 「あー」

圭 「いつもジーパンにTシャツだったのにさ」

朱里 「全部捨てちゃったんだよね」

圭 「は？ なんですよ」

朱里 「もうテキトーな服着てちゃだめだなんて。わ、あそこ事故ってんのかな？」

路肩で車が停まっている。ボンネットが開いていて、故障している様子。

男女がエンジンルームを覗いており、何やら話をしている。

圭 「故障かね。でも男いんなら大丈夫かな」

朱里 「意外と女のほうが直しちゃったりするかもよ」

圭 「ありえる。ここにもそういう奴いるし」

朱里がにやりと笑う。

朱里 「よっぽどのことじゃなければいけるね」

圭 「さすがっす」

朱里 「まあ趣味の範疇ですよ」

圭 「デザイナー業界って、車が趣味なやつ多いの？」

朱里 「中まで弄ろうってタイプは少ないかな。圭は？ 最近バイク乗ってないの？」

圭 「売っちゃったんだよねー」

朱里 「（信じられないというように）ええ？」

圭 「時間ないし。移動も電車があればいいじゃん」

朱里 「年一じゃなくて、もっと頻繁に誘うべきだったかあ」

圭 「説得しようとするな」

朱里 「したかったよ。あー、もう。もっと誘えばよかった」

圭 は悔しそうな朱里を見て、微笑む。

圭 「もっと誘えよな」

朱里 が大きく息を吐く。

音楽の音量をあげる。

車のスピードがあがる。

圭、速度があがるのを感じ、朱里を見る。

化粧を施した横顔に見惚れる。

会話はなく、音楽が流れるだけ。

3. 高速道路（夜）

朱里の車が走っている。

道路の向こう側には、朝焼けの海が広がっている。

4. 駐車場（早朝）

海沿いの駐車場。

圭と朱里は、堤防に肘をついて、海を眺めている。

朱里 「浄化される」

圭 「それも毎年言ってるな」

朱里 「……来年は言わないけどね」

圭 「言うなとは言っていないじゃん」

朱里、圭に向き直る。

圭からは逆光になっている。

朱里 「私、来年は韓国にいる」

圭 「韓国？ いつまで？」

朱里 「契約上は3年。でも、更新するかも」

圭、動揺して言葉が出ない。

太陽は明るさを増し、朱里の輪郭を更に輝かせる。

圭 「えっと、それはさ。なんていうか……夢を叶えたつてこと、だよな？」

朱里が頷く。

圭 「そっか。すげえなお前」

朱里の表情は、逆光でわからない。

圭 「ずっと韓国行きたいって言ってたもんな。ホントに行っ

ちやうんだ。よかったなあ」

朱里 「（鼻声で）ありがとお」

圭 「泣いてんの？」

朱里 「泣いてない」

朱里が圭に背を向ける。

5. 車内（朝）

海沿いを走行中。圭が運転している。

朱里の膝には圭のシャツが乗せられている。

圭 「この辺、アジフライの店あったよな」

朱里 「行列できるとこね。いいじゃん」

圭 「お前、胡坐かくなよ」

朱里 「この服装でできるわけ」

圭 「てか。ラクな服捨てたって、どういうこと。わかんないんだけど」

朱里 「ブランドの方針。外出時は気を遣え。ラクを着るな。ラフを着こなせって」

圭 「そんなん車のメンテできねえじゃん」

朱里 「だからこの車、アンタに任せるわ」

圭、路肩に車を寄せる。

圭 「何言ってんの……」

朱里 「売るのも嫌だし。駐車場代は私出すよ」

圭 「いや、そういうのはさあ」

朱里 「圭しかいないんだって」

圭、目元を押さえ、天を仰ぐ。

朱里 「たまに乗ってくれば——それ以上は望まないから」

圭 「ちよつと黙ってて」

圭が深呼吸をする。

朱里の目を見て、

圭 「付き合う？」

朱里 「へっ？」

圭 「へっじゃないよ。だってそういう流れじゃん。車任せるとかさあ」

朱里 「いや、深い意味はなかったんだけど……」

圭、驚きの表情を浮かべる。
じわじわと恥ずかしくなり、外に出ていく。
朱里 「ちよっと！」

6. 道路（朝）

車から距離を取る圭。
追いかける朱里。

朱里 「ちがう！ 今のナシ！」

圭 「氣イ使うなって！ 余計恥ずかしい！」

朱里 「ちがうって！ フラグじゃないけど、前向きに——」

圭 「だから、そういうのが——」

圭、朱里に後ろから抱きしめられる。

朱里 「ずっとそういうんじゃないかったじゃん」

圭 「お、おう」

朱里 「私、韓国行くし。年齢もアレだし。話し合うこと多すぎるじゃん」

圭がゆっくり振り向く。

朱里が恥ずかしそうにしている。

圭は朱里の手を取り、歩き出す。

圭 「まずは腹ごしらえだわな」

ふたりは車へ向かう。

7. 定食屋・外観（朝）

アジフライののぼり旗がいくつか立っている。

圭と朱里は、行列に加わっている。

店前にある駐車場には、朱里の車が停まっている。

8. 車内（朝）

ドリンクホルダーのコーヒーは両方とも空になっている。

おわり